

第I章 序 言

この報告は奈良国立文化財研究所が昭和34年以来継続して発掘調査を実施している奈良市佐紀町の特別史跡「平城宮跡」の発掘調査報告の一つとして編集したものである。今回は、昭和43年度に実施した第二次朝堂院の東朝集殿地域の発掘調査において、朝集殿遺構の下層で検出した古墳時代の遺構・遺物をとくにとりあげて報告することにした。¹⁾なおこれに関連して同時代の同種の遺構・遺物を、昭和51年度に平城宮跡の西北方に位置する佐紀池の発掘調査で検出したのであわせてここに収録することにした。²⁾

従来からも『平城宮報告』のなかで古墳時代の遺構・遺物をとりあげた例は多い。以下簡単にそれについてふれておきたい。平城宮及びその周辺の発掘調査で普遍的にみられる古墳時代の遺物は埴輪である。これが平城宮の背後にある、奈良県の三大古墳群の一つである佐紀盾列古墳群とかかわる遺物であることは多言を要さないであろう。実際内裏北で検出した市庭古墳は、現状は後円部のみが遺っているが、元は前方後円墳であり、平城宮の造営によって宮内にはいる前方部は削平され、周濠は埋め立てられたことが判明した。³⁾また内裏から大極殿付近で検出した神明野古墳は、その全てが平城宮の造営によって削りとられたものであることが数次にわたる発掘調査で判った。⁴⁾これによって、佐紀盾列古墳群はもとは現状よりはさらに南に下って存在し、内裏・朝堂院の所在する台地の少くとも北半部に広がるものであることが明らかになった。これは『続日本紀』和銅2年に平城京造営中の「もし彼の墳隴発き掘らるれば、随て即ち埋みおさめて普く祭醑を加え以て幽魂を慰せよ」とある記事に照応するものであろう。

最近はまだ、市庭古墳後円部の西北部を調査する機会があったが、その結果は予想外にも、同古墳が二重の濠をめぐらすものであることがわかり、さらに、奈良時代には墳丘の一部を削り、内濠を埋め立て、外濠を園池に利用していることが判明した。⁵⁾周濠の葺石を園池に利用することは、平城京内の住宅遺構にも数例ある。なお平城宮内の古墳時代の遺構としては、東院地区の西辺寄りで方形周溝墓が1基検出されていることをつけ加えておこう。⁶⁾

つぎに平城京の古墳時代の遺構としては、平城京東一坊大路の調査で新たに検出した2基の古墳があり、そのさいウワナベ古墳外堤部もあわせて調査した。ウワナベ古墳は奈良県でも有数の規模を誇る古墳の一つであるが、その東側の外堤が明らかになり、外堤内側の葺石や堤上の2列の円筒埴輪列が良く遺存していて、外堤の旧状をほぼ復原することができたことは大き

1) 「平城宮跡第48次調査」『奈良国立文化財研究所年報 1969』 pp. 40-44。以下『年報』と略称する。
2) 平城宮跡第101次調査『年報1977』 pp. 28-30。
3) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VII—内裏北外郭の調査—』奈良国立文化財研究所学報 第26冊, 1976。以下『平城宮報告

VII』と略称する。p. 53。
4) 『平城宮報告 I』1961, p. 12, 『平城宮報告 III』1963, p. 20, 『年報 1972』 p. 31, 『年報 1979』 p. 1
5) 『年報1981』 p. 22, 奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981。
6) 『年報1968』 p. 38。

第1章 序 言

な収獲であった。新たに検出した2基の古墳は、ウワナベ古墳の陪塚に比せられるもので、平城京の建設に際してそれらを大部分は削平しながらも、葺石のある前方部を一部園池に利用して住宅施設の一つにとりいれている¹⁾。

以上のようなものが、従来平城宮及び平城京の発掘調査で検出した古墳時代の遺構・遺物の主なものであるが、それらは平城京の造営によって削平及び変形させられた墳墓であった。したがって、これまでの『平城宮報告』では、それらの遺構は、平城宮及び京の前史遺構としてとり扱い、敢て別冊をたてることはしなかった。

しかしながら、今回ここに報告するものは、古墳時代の溝中から検出した多量の生活遺物であり、住居跡は未出ではあるが、生活遺跡にかかわる遺物である。同時代人がこの付近で営んだ生活をうかがわせる格好の資料であり、古墳時代研究の良好な一括資料といってよいであろう。従って今回報告のものは敢て平城宮の遺構を全くはずして、この資料だけで一冊を編集することにした。題して古墳時代Ⅰとしたのは今後とも同時代の遺構が新たに見出される可能性が高いからであり、その際には同様の取扱いをしていきたいと考えている。昭和38年度の平城宮西南隅の発掘調査において、時代は異なるが、弥生時代の大規模な集落遺跡を検出しており、竪穴住居群をとりまく周濠等から出土した遺物も重要なものである²⁾ので、これもまた別冊で『平城宮報告』の弥生時代篇として報告を予定している。

平城宮内で検出した弥生時代や古墳時代の遺構・遺物の調査研究は、単に平城宮の前史を明らかにしてくれるだけでなく、平城宮造営前の地形復元に直接役立つ資料でもある。前述したように、奈良盆地の最北端に位置する佐紀の土地は、少なくとも弥生時代以来の人間の生活の営みによって、かなりの地形の改変をうけたわけで、従って、弥生・古墳時代の地形地物が復元されることによって平城宮を造営するための整地事業がどの程度おこなわれたかを知る手掛りが得られるのである。

今回報告する古墳時代の遺物のなかでもっとも多いのは木製品であるが、木製遺物の保存には困難な問題が多い。奈良国立文化財研究所では、発掘事業をはじめた当初からその問題の解決に努力をしてきたつもりであり、東京国立文化財研究所の協力を得つつ、その科学的な保存処理法の確立のために種々の試みを実施してきた。そして現在、水溶性の合成樹脂（PEG）を木製遺物に含浸させる方法によって、その保存処理を実用化することができるようになった。本報告書収載の木製遺物についても、その保存処理の方法と結果を報告することにしたのは、今後の同種遺物の保存に資するためのものである。

最後に本報告収載の古墳時代資料は、いまから15年以上も前の発掘調査で出土したものであるが、その後奈良県はもとより近畿の各府県における発掘調査の進展に伴い、古墳時代の同種遺物の出土例が増加するようになった。いまになってはそれらとの比較研究をおこなうことが必要であり、若干の考察を後段でおこなったが、詳細は他日を期することにし、ここでは二、三の問題を指摘するにとどめた。

1) 『平城宮報告Ⅵ』1974, p. 109。

2) 『年報1964』p. 39, 『年報1965』pp. 30-32。

発掘調査関係者は次のとおりである。

1968年度（第48次調査）

調査責任者	奈良国立文化財研究所長	小林 剛			
	平城宮跡発掘調査部長	坪井 清足			
第一調査室	沢村 仁	宮沢 智士	猪熊 兼勝	高島 忠平	
	阿部 義平	小笠原好彦	宮本長二郎	木下 正史	
第二調査室	田中 琢	牛川 喜幸	本村 豪章	三輪 嘉六	
	石井 則孝	横田 義章	村上 認一		
第三調査室	狩野 久	佐原 真	松下 正司	藤原 武二	
	伊東 太作	石松 好雄	安達 厚三		
第四調査室	坪井 清足	八賀 晋	細見 啓三	工楽 善通	
	森 郁夫	西谷 正	栗原 和彦	田中 哲雄	
保存整理室	横山 浩一	河原 純之	町田 章	佐藤 興治	
	山沢 義貴	八幡 扶桑	佃 幹雄		
史料調査室	田中 稔	横田 拓実	鬼頭 清明	加藤 優	
	真鍋 俊照				

1977年度（第101次調査）

調査責任者	奈良国立文化財研究所長	坪井 清足			
	平城宮跡発掘調査部長	狩野 久			
考古第一調査室	町田 章	沢田 正昭	菅原 正明	土肥 孝	
	小林 謙一	中村 友博	八幡 扶桑	佃 幹雄	
考古第二調査室	佐藤 興治	吉田 恵二	須藤 隆	安田龍太郎	
	井上 和人				
考古第三調査室	森 郁夫	岡本 東三	毛利光俊彦	巽 淳一郎	
遺構調査室	宮沢 智士	中村 雅治	清水 真一	宮本長二郎	
計側修景調査室	安原 啓示	田中 哲雄	光谷 拓実	加藤 允彦	
	森 蘊（調査員）				
史料調査室	横田 拓実	今泉 隆雄	綾村 宏	加藤 優	
主任研究官	細見 啓三	加藤 優	宮本長二郎		

遺物整理、保存処理については上記関係者の他に主として考古関係の調査部員が参加した。稲田孝司、甲斐忠彦、黒崎直、田辺征夫、西村康、西弘海、山中敏史、金子裕之、山本忠尚、西口寿生、岩本圭輔、大脇潔、千田剛道、松沢亜生、岩本正二、川越俊一、山崎信二、秋山隆保。本報告書の作成準備は1975年に開始し、その後調査部における数回の討議を重ねて最終原稿を完成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第I章狩野久、第II章佐藤興治、第III章1・2佐藤興治、3菅原正明、第IV章1須藤隆、吉田恵二、土肥孝、井上和人、2吉田恵二、3町田章、4菅原正明、第V章1菅原正明、2井上和人、3A、B町田章、C沢田正昭、4佐藤興治、樹種分析光谷拓実

英文要訳はシカゴ大学 James E. Ketelaar 氏をわずらわした。

写真撮影は佃幹雄、井上直夫、渡辺衆芳が担当し、藤村礼子、池田千賀枝が助力した。

編集は坪井清足、鈴木嘉吉、岡田英男、田中琢、狩野久の指導のもとに着手し、佐藤興治がこれを受けて調査部員の助力を得て完成した。